

鎌倉時代と明治大正時代の建築

工學博士 關野貞

今夕は「鎌倉時代と明治大正時代の建築」といふ題に就て私の専門の立場から御話を申上げる光榮を得ました。鎌倉時代と明治大正時代と申しますと随分年代が懸隔して居りました。餘り懸離れて居るやうに思ひますが、兩時代の建築界の状態は互ひに類似して居る所が無いではありません。一体我國の建築界に於て大なる變動の起つたのが古來三度あります。第一回は大化革新の時であります。當時唐の優秀なる文化と共に其發達せる藝術が我國に輸入せられて所謂奈良時代の立派な藝術を作出し我國上代の建築の基礎が始めて爰に置かれたのであります。夫から第二回は鎌倉時代の初めであります。此際には宋からして建築と共に宋の建築の様式を我國に傳へ我建築界に大影響を與へました。是は我近世建築の源となつたのであります。第三回は即ち明治大正時代であつて御承知の通り歐米の文化を盛んに輸入し、我國の建築界は其爲に大なる影響を今現に受けつゝあるのであります。尤も第一回の唐時代の影響を受けます。前に欽明十三年に百濟から始めて佛教が輸入せられて支那の南北の文化を朝鮮を通して我國に輸入して我國建築に大なる變化を與へたことがあります。併し此影響は大化の革新以後に於て優秀なる文化が輸入せ

られると共に忽ち消滅に歸してしまつて後世には殆ど何等の影響をも殘さなかつたのであります。然るに此孝徳天皇以後に唐から入つて來た所の文化は奈良時代の立派な藝術を造り出し、引續いて平安朝を経て藤原時代に至り是れが立派に日本化して我國民固有の藝術となりました。しかるに鎌倉時代に更に新たな形式が宋から輸入され、それが從來の建物の形式と結付いてさうして一種の新たな形式が起つてそれが結局其以後の室町時代の形式になり、終に桃山時代から徳川時代に入つて再びそれが日本化して我國民の趣味を發揮せる立派な固有の様式となりました。然るに明治時代に至り歐米の文化を輸入すると共に歐米の建築が盛に這入つて來て我國の建築界が今大なる影響を受けつゝあるのであります。今夕は第一回の大化革新と共に起つた建築界の變動のことは省きまして、主として鎌倉時代に輸入せられた末の文化が如何なる影響を其當時の建築界に與へたかを御話申上げて、さうして今日の建築界の狀態と比較して見たいと思ふのであります。

宋の建築の様式がさうして我國に傳來せられたかと思はれます。是は御承知の通りに第一は重源上人に依て輸入せられ、第二は榮西禪師に依て輸入せられたのであります。重源上人は仁安三年に支那に渡りました。さうして其際に榮西禪師と四明で遇つたのです。それから二人で天台山に登り又明州に引還し更に阿育王寺を見て日本に歸りました。それが仁安三年であります。それから丁度十八年程たちまして治承四年平重衡の爲に奈良の東大寺が焼かれて大佛殿が烏有に歸した。當時後白河法皇が早速東大寺の再興

を計畫せられ、重源上人を東大寺の造營の大勸進とせられました、そこで重源上人が東大寺再興といふ重任を負ふことになつたのであります。重源上人は第一回の歸朝後それまでに二度ばかり支那に往つたやうであります。其事に就きましては玉葉集にも東大寺造立供養記にも入唐三度と書いて居りますから確かであらうと思ひますが、何時行つたか分りませぬ。當時南宋の都は臨安府即ち今の浙江省の杭州にありましたが之を中心として主として南の方に於て禪宗が非常に盛んに行はれました其重なる伽藍を舉げますと杭州には靈隱寺と淨慈寺の二寺、それから杭州から七八里西の方少し北に寄つて餘抗に徑山萬壽寺といふのがあり、今の寧波の東の方約二里ばかりに育王寺があり、それから更に二里ばかり参りますと天童寺があります。此杭州の淨慈寺と靈隱寺、餘抗の徑山萬壽寺それに寧波の天童寺、育王寺を其當時五山と稱しました。それから南の方台州に天台山寺いふ有名の山があつてそこには國清寺萬年寺などいふ大伽藍がありました。主として重源上人の参りましたのは是等の地方に止つて居つたので結び禪宗の五山、天台山などを廻りましたのであります。又南無阿彌陀佛(重源)作善集及び東大寺造立供養記など其當時の記録で見ますと重源上人が阿育王寺に参りました際、釋尊の舍利を藏めたと傳へらるゝ所の舍利殿が荒廢して居りましたが寺では修復する力が無いので、重源上人が態々日本の周防國から大きな材木を船に積んで支那に運び之を再興しました。其舍利殿は、東大寺造立供養記に依りますと非常に廣大な建物で真中の柱間の長さが三十尺もあつた。それを以ても其建物の大きいことが分るといふことが

書いてあります。これを見ると重源上人が支那へ行き佛教の研究の傍々日本から大きな材木を運び育王寺の舍利殿の再興をしたのであります。此點から考へて見ると重源上人は支那に於て大建築の經營に一つの經驗を有つて居りそして建築に就て一種の興味を有つて居つたやうに思はれる。尙よく考へて見ると重源上人は實際殆ど女人といつても宜い位の建築に就ての知識を有つて居たやうであります。東大寺大佛殿の様な偉大なる建築の再興は容易のことではない、其事に當るには餘程のしつかりとした偉い人物でなくてはならぬといふので後白河法皇から法然上人に再興の勅命がありました。ところが法然上人が辞退して重源上人を推選しました。重源上人は豫て支那に於て大なる建築を建てることに經驗を有つて居りましたから十分に自信を有つてそれを御引受いたしましたのであらうと思ひます。それから尙ほ法然上人行狀傳を見ますと斯ういふことが書いてあります。重源上人が愈々東大寺の大勸進となつて大佛教を再興しようとした際に大勢の木工を集めて自分は垂木の下に木舞を打ちたいと思ふがどうだらうといつたのです。普通ならば桁の上に垂木を掛け其上に木舞を打ちそれから其上を板葺にしたり瓦葺にするのであります、兎に角垂木を渡して其上に木舞を打つのが普通である。それを重源上人が反對に垂木の下に木舞を打たうと思ふがどうかといつたのです。木工共は不思議に思ふてさういふことは出来ませぬ、垂木の上に木舞を打つのが普通です垂木の下に木舞を打つのは今まで聞いたこともございませぬと申しました。ところが重源上人は自分は考へる所があるから兎に角やつて見ろといふ。誰も引受ける者

がない。さういふことをやつたら世間の物笑ひになりますと辞退する。其内唯一人やつて見ようといふ者が
ありました。それではお前はさういふ仕方を見たことがあるかといひました所が、それは見たり聞い
たりしたことはありませんが、兎に角御指圖に従つてやつて見ませうといひました。さうしたら重
源上人がイヤ實は自分も垂木の下に木舞を打つなどいふことは出来るとは思つて居ない、唯お前方の
心得方を試みたのである、お前は感心な者だと其男を総棟梁にしたといふことであります。是は事實で
あるかどうか分りませぬが、斯ういふことも多分あつたらうと思ひます。それは何故かといひますと、
是迄の日本の建築の様式は奈良朝に唐の様式を輸入した者が段々と發達して藤原時代に至り充分に日本
化して固有の特色を發揮したのであります。然るに重源上人は從來の形式を捨て、新に宋に於て自分が
研究して來た所の様式を用ゐて大佛殿を再建しようといふことを考へたのです。丁度此鎌倉時代は御承
知の通り政治上の大變動がありまして從來の公家の政治が武家の政治に變り政權は京都を中心とした貴
族の階級から離れて田舎から起つた所の武家の掌中に歸し國民は從來の舊習舊慣を打破して新たな生
活の様式を建設しようとする時代でありました。何でも古いものは皆捨ててしまつてさうして新しい珍
しいものをやつて見ようといふのが全体の調子であつたのです。しかし如何なる時代にも保守的の分子
のあるもので、極めて新しい事を實行しようと思ふ者があれば又必ず頑強な反對者もあるものでありま
す。殊に從來の建築家、大工は藤原時代からの系統に屬する流儀で仕立てられて來たのでありますから、

皆自分の研究し來つた形式は善いものと考へて居る。それを新たに宋から持つて來た、殊に素人の坊さんの持つて來た、從來のものど悉く皆變つた構造形式で日本に於ける唯一の誇りであつた三國一の大佛殿を再興しようといふので畏して出來るか出來ぬか分らぬ程不安心のものでありますから反對の起るのは當然でありませう、重源上人が固より覺悟の上であるから最初に彼等の度膽を抜いて一言も口を利かせないやうにしたものと思ひます。さていよいよ重源上人が大佛殿を再興しました時支那から研究して來た所の構造様式を用ひましたので從來の大佛殿を建て、あつた構造様式とは全然變つたものでありました更に其新たな形式を以て大佛殿の前面に南大門を作り其他伽藍に必要である所の總ての建築を皆其形式で造りました。此東大寺の大佛殿は其當時に於ける非常な大建築で昔の奈良朝に出來た建築を其儘の大きさに再興したのであります。今日の大佛殿は元祿寶永年間の再興であつて其當時の建築から較べて見ると二廻りも小さくなつて居ります。それでも現今世界最大の木造建築物であります。それによつても鎌倉時代のは如何に偉大であつたが想像されます。さういふ大建築であるから近畿地方は勿論のこと海内諸國中から澤山の大工が集つて來て重源上人の指揮の下に新たなる形式に依て大佛殿の再興を遂げましたそれが爲に彼等は此新たな形式を十分に習練することが出來大佛殿の落成後其地方地方に歸り此新しい形式を忽ち日本中に廣めたのであります。ところが爰に注意すべき事柄は重源上人の支那から持つて來た形式は從來の形式と較べて見るとそれは目先の變つたものであり極めて斬新であり剛健であり

自由であります。けれども、我國民の趣味には適はなかつた所があつたのです。そこで其當時の我建築家は重源上人が宋から傳來した形式を其儘用ゐずに其長所を深つて、それを從來の様式に巧く調和しました。さうして一種の新しい様式を造り出したのであります。此從來の様式即ち藤原時代の様式は昔の奈良時代からずっと續いて發達して來たのであつて之を吾々建築家は和様といつて居ります。尤も奈良時代の様式は唐から這入つて來たのであるが其後日本に於て十分日本化したので此様式を和様といふのであります。さうして之に對して上人が輸入したものを天竺様といつて居ります。天竺様といふのは不適當な名稱で天竺から持つて來たもので、何でもなく却て、支那から輸入されたのであります。重源上人は法然上人の弟子で大に念佛宗を弘め東大寺大佛殿の再造ばかりでなく諸國に淨土堂即ち阿彌陀堂を建てました。伊賀、山城、攝津、播磨、近江、備中、周防といふやうに彼方此方に彌陀專念の道場を建てました。それ等の寺は皆此天竺様で造つたのであります。其中今日残つて居りますのは山城の醍醐寺——醍醐寺は上の醍醐と下の醍醐とに分れて居りますが、上の醍醐に重源上人が支那から傳來した一切經を納める爲に經藏を建てました。其經藏は天竺様で出來て居つて今日残つて居ります。又播磨國の淨土寺に藥師堂と阿彌陀堂とを建てました。藥師堂は後世焼けて再建しましたが、阿彌陀堂は昔のまゝ残つて居る。東大寺の大佛殿は永祿年間に松永久秀に焼かれましたが、重源上人の建てた南大門は幸に残つて居り

ます。ですから重源上人の建てたものでは東大寺の南大門、醍醐の經藏、それから播磨の淨土寺の阿彌陀堂が残つて居るわけで、何れも重源上人が支那から輸入した天竺の形式で出来てるのであります。ところが今中上げましたやうに此天竺様は其まゝではどうも其當時の趣味に適はなかつたと見え當時の建築家は天竺様の中の宜い部分を從來の日本建築の様式に取り入れさうして一種清新にして雄勁なる立派な形式を造り出しそれが遂に鎌倉時代の建築様式の中堅とあつたのであります。吾々はそれを和様式の中堅と新派と稱しそして藤原時代から繼續して來た様式を和様の舊派と稱へます。それから次に榮西禪師に依て傳へられた宋の建築の様式を御話しようと思ひます。

此榮西禪師は重源上人と一緒に支那を廻つて仁安三年に日本に歸りましたが、其後十八年を経て建久二年に再び支那へ參りさうして五年間彼方に居りました。榮西禪師は初め印度まで行く積りで臨安府に行つて政府の許可を乞ひましたが其當時は印度に行く所の途中は總て金に占領されて居りましたから到底參ることが出来ませぬ。そこで已むを得ず目的を變へて先天台山に上り虛堂禪師に就きて禪宗を研究しました。其後虛堂禪師が天童寺に變りましたので榮西禪師も亦之に隨ひ天童に移りました、其間に育王寺に行つたり靈隱寺に行つたりして所謂禪宗の五山を廻遊して建久二年七月歸朝しました。此榮西禪師もなか／＼偉いお方でありまして、天臺山の萬年寺に居りました時、三百萬の錢を寄附して山門と兩廡を再建し更に門の前に大きな池を開き又大慈寺智者塔院を修覆し覽衆亭を建てました。そこで萬年寺

に於ても榮西禪師の功業を記念せんが爲め其祖師の堂に安置したといふことであります。それは其當時の日本の記録にも見えてゐますが天臺山志にも淳熙十四年日本僧榮西山門兩廡を建て仍て大池を開くといふ記事が載つて居ります。榮西はかやうに天臺山志に載るやうな大きな仕事をして居ります。さういふ風でありますから榮西禪師も必ず建築の方に興味を有ち其構造様式なども相當に研究したものに違ひないのです。榮西は後に天童に移りましたが、其師虛堂禪師が千佛閣を建てんことを計畫しましたけれども金が無くて出来ない。そこで榮西禪師がそれでは私が日本に歸つたならば其建築の爲に必ず材木を送りませうといふ約束をしました。さうして建久二年に日本に歸り其翌年巨大な材木を天童山に送りました。其事も天童山志に非常に精しく書いてあります。それによりますと巨材を大きな船の再側に結付けて海に浮かして持つて來た。それを以て虛堂禪師が宏壯なる三層の千佛閣を建てましたさうです。支那に留學中でも天臺山の山門を再建し其他いろいろの建物を修復する力を有つて居つた。日本に歸つても千佛閣を造る程の大材を送つてやるといふ力量を有つて居る方であつた、歸朝の後建久四年筑後に千光院を建て建久六年博多に聖福寺を建てました。其後建久二年に源賴家が京都の土地を寄附して榮西の爲に建仁寺を建てました。是が京都に於ける禪宗建築の最初であります。其頃榮西禪師が新に禪宗を唱へましたに對して叡山の僧侶から非常な壓迫を加へた。隋分此頃の叡山の坊さんは非常な勝手氣儘なもので、他の宗旨に對しては壓迫を加へたのであります。榮西はなかく、伶俐な人でありますから、正

面から反抗せずに或程度まで妥協的態度を執つて之を緩和しました。其が東大寺の再興がまだ全部出来上らずに重源上人が亡くなりましたので、榮西禪師は其後引續いて東大寺の幹事となり再興の大工事に當りました。其頃法勝寺の八角九重塔の再建といふ大工事が起りましたが中々工事が困難で三年経つても出来ないで、榮西禪師は朝廷から再興の主事に命せられました。が早速それを完成しました。さういふ風に榮西は初めて日本に臨濟禪を傳へたばかりでなく、初めて我國に宋風の禪宗伽藍を建立しました。建仁寺が即ちそれであり、又博多の聖福寺もそれであつたらうと思ひます。前申上げもしたやうに榮西は支那に於て既にいくつも健物を建立し修理してゐましたから、建築に就ての知識を十分有つて居つたに違ひない。そして自分も日本に歸つたならば禪宗風の伽藍を造つて見ようといふ抱負を有つて居つたに違ひないのです。其上もう一つ考ふべきは固より榮西は自身に建築に關する知識を有つて居つたに相違ないが事に依ると二回目に支那に行つた際に専門の建築家を連れて行つたのではなからうかといふ疑ひもあるのです。それに就きましては建仁寺に昔から大工棟梁がありました、それが建仁寺流といふ形式を傳へて居りました。其建仁寺流といふのは何であるかといふと、即ち宋から輸入された禪宗風の建築である。其建仁寺流の元祖は色々の記録で見ますと横山權頭吉春といふのであります。此横山權頭吉春は曾て入宋して徑山萬壽寺に行つて堂塔伽藍の様式を研究し歸朝の後建仁二年建仁寺を建て所謂建仁寺流の祖となつたのであります。若し之が事實であるならば建仁寺は榮西の創立でありますから此横山權頭吉

春は或は彼が宋へ連れて行つて宋風の建築を研究さしたのではないかと思ひます。何れにしても榮西は禪宗を日本に傳へると同時に新に宋の建築様式を日本に傳へたに相違ない。此様式を後世の建築家は唐様と稱して居ります。即ち藤原時代から繼續してゐる舊式を和様といふのに對して此新式を唐様といつて居る。前にも申上げた如く重源上人が東大寺を造る時に用ゐた様式を天竺様といつてゐますが此唐様と天竺様とは畢竟其當時の南支那に行はれた様式に相違ないのであります。兩者は大体に於ては多少の關係がありますけれども、一部分組物の點に於て大に相違する所があるのであります。榮西禪師が日本に禪宗を輸入してから其後禪宗が朝廷や幕府の崇信する所となりました。北條時頼は支那から來た道隆に命じて建仁寺を鎌倉に立てました。北條時宗は又支那から來た無學禪師に命じて圓覺寺を建立せしめた。圓覺寺を建てます際には態々日本から大工を支那にやつて禪宗伽藍の制度を研究せしめたといふことがありますから、宋風の様式は益日本に廣まつて來たのであります。其上鎌倉時代に於ては支那から歸化した所の禪宗の坊さんがなかく多數ございました。又日本から支那へ出かけて禪宗を研究した者も亦随分多數ありました。又禪宗の一派曹洞宗を開いた道元禪師も支那へ參りましたが向ふから來た坊さんも亦此方から研究に行つた坊さんも皆江蘇省、浙江省に於ける禪宗の五山や、天台山などを巡遊したのみで、是以外には餘り旅行して居ない様である。そこで考へて見ますと最初に重源上人が輸入した天竺様も育王寺あたりの様式を眞似たに相違ない。又榮西禪師が用ひた唐様も天台山あたりの禪宗伽藍の様式

であつたに相違ない。故に鎌倉時代の建築界には斯ういふ風に支那から違つた流派が二つ這入つて來ました。それに從來の藤原時代から繼續して居る和様もあります。そこで圖に現はして見ると、



即ち藤原系に屬する者は所謂和様舊派であります、そして宋から重源榮西によつて新に輸入された者に天竺様と唐様の二つがあります。ところが天竺様は今御話しましたやうに我建築家の趣味には餘り適はなかつたと見えて此時代には其儘では行はれなかつた。唯其長所が和様の方に攝取されて所謂和様の新派といふものが出來ました。然るに禪宗は鎌倉時代に於て益盛となり禪宗の大伽藍が京都鎌倉を中心として他の地方に於ても多數建築され隨て唐様の流派は鎌倉時代を通して大に行はれました。此唐様の分子が又從來の和様の舊派に攝取されて、そして和様の新派となりました、畢竟藤原時代から繼續して居る所の和様の舊派は天竺様と唐様を攝取して、さうして一種清新にして雄健なる新流派を造り出したのでありまして、此新流派が鎌倉時代の建築の中心となつて最も勢力があつたのであります。尤も唐様も禪宗の隆盛に伴つ 建築界に勢力があつたのであります、是は主として禪宗伽藍に限られて居つた。禪

宗以外の伽藍は殆悉く和様の新派を以て建築されたのであります。併し此時代にも保守的の分子がありまして、和様の舊派も相當行はれて居りました。同じ奈良にしましても東大寺も興福寺も平重衡に焼かれましたが東大寺に於ては重源上人が盛に天竺様を用ゐて大佛殿其他を再興せるに反し、興福寺に於ては純粹の和様の舊派で諸堂を再建したのであります。其當時の建築で今日残つて居るものは北圓堂三重塔で何れも純然たる藤原系の建築である、又其後足利時代に再築された東金堂五重塔も亦皆和様の舊派であります。又京都に於ても東寺といふ眞言宗の大伽藍がありますが、徳川時代までも和様の舊派を堅く守つて居りました。さういふ風に鎌倉時代に於ても和様の舊派が一方で行はれて居りまして、さうして天竺様も唐様も行はれ、更に天竺様、唐様を攝取して發達した所の和様の新派が最も盛んに行はれて居りました。思ふに鎌倉時代では從來の傳統的の形式ある所へ新たに宋から天竺様唐様の様式が輸入せられたのであります、其當時は一般の人心が古いものに飽いて總て目新しいものを採用せんとする時代であつたのです。それであるから天竺様や唐様は忽ち盛に這入つて來たにも拘らず、それでも從來藤原時代に於て我國民の趣味を現はした所の我固有の形式を捨てることは決してしない。其儘それを中心として天竺様の宜い所も採り唐様の宜い所も採つて一層の發達を遂げ一種清新の和様の新派を造り出しました。是が足利時代から徳川時代に掛けての建築様式の根本となつたのであります。

今爰にある寫眞は興福寺の北圓堂で、是は鎌倉時代に和様の舊派で建てた建物であります。此寫眞は

重源上人が天竺様で建てました播磨の淨土寺の阿彌陀堂であります。此兩者を比較して見ますと組物が特に非常に相違して居ることが分ります、是は鎌倉の間覺寺の舍利殿であります。現今鎌倉に残つて居る所の唯一の鎌倉時代の禪宗建築であります。是は榮西禪師が輸入した所の唐様で立てられてゐます。此處にありますのは愛媛縣の大山寺の本堂で、從來の和様の様式に宋から輸入せられた天竺様の宜い所を採つて發達した所の和様の新派の代表的建築であります。其處にありますのは河内の觀心寺の本堂であつて楠正成が建武元年に再建した建物であります。是は大体に於て和様の舊派に唐様の分子を巧みに取入れたものであります。此柱の上にある組物は和様の舊派でありまして、柱と柱との間にある組物は唐様で出來て居ります。内部の構造も和様と唐様とを巧みに折衷して造つて居るのであります。斯ういふ風に鎌倉時代に於ては從來の藤原系の様式に天竺様を入れて大山寺の本堂のやうな立派な建築が出來ますし又それに唐様を入れて觀心寺の本堂のやうな立派な建築があらはれたのであります。鎌倉時代の建築界に就きましては、是で大体其當時の様子が御分りになつたらうと思ひます。

尙ほ此外住宅建築に就て見ますと、鎌倉時代に宋から輸入せられたものは主として禪宗でありまして、此禪宗に伴つて這入つて來た建築も佛寺の方に大なる影響を及ぼしましたが、一般の住宅建築には大した影響は與へなかつた。併しそれでも多少其當時の住宅建築に影響を與へまして、それから足利時代になつて書院造りと稱する住宅建築の形式があらはれるのであります。此書院造りは足利時代から桃山

時代に大成せられて徳川時代を経て今日まで繼續して居ります。吾々の住まつて居る住宅建築は即ち此書院造りの形式に屬するのであるのです。是から明治大正時代のことを少しく御話しようと思ひます。

明治時代は從來の封建政治が毀れてさうして立憲政体が起り、社會の組織に於ても一般の生活狀態に就ても大なる變動を來しました。其上に歐米の文化に接觸して盛んに其輸入に勉め爲に我國の文化は大なる影響を蒙ることになつた。建築の方も矢張り其通りでありまして、徳川時代から繼續して居る所の吾々の建築は歐米から這入つて來た所の洋風建築の爲に今現に大變化を來して居るのであります。其大體の形勢に於ては鎌倉時代と多少似て居る點があります。鎌倉時代は公家政治が毀れて武家政治が起つた。明治時代は武家政治が毀れて立憲政体が起つたのであります。何れにしても長い間の傳統的の慣習や制度が毀れて新なる制度や慣習が建設せられるのであります。一般の時代精神といふものは古いものは皆毀れてしまつて、何もかも新しいものを造り出さうといふ、氣分であつた。其處へ歐米の變つた所の文化が我國に輸入せられたのでありますから、盛んにそれ等が採用せられて我國の政治上にも社會上にも其他慣習上にも大變化を興へたのであります。建築も之につれて今日非常な變動を経験して居る。其形勢は鎌倉時代に宋風の建築が這入つたのと較べて見ると非常な相違がある。鎌倉時代では宋風の建築が這入つたけれども、それは構造の方からいふと從來の者と同様の木造建築である。それから又それ等の建築は主として宗教的方面に限られて居つたのである。ところが明治時代に歐米から這入つて

來たのは之と比較すると非常な相違である。第一從來の日本の建築は材料の點からいふと、木造本位の建築であつた。西洋から這入つて來た建築は之に反して石造本位の建築で煉瓦や石で造る所の形式である。建築の構造形式は材料に依て非常な支配を受ける。日本は古來森林國で木材は豊富であつた、伐つても伐つても伐り盡せない程の木材があつたのでありますから、面倒な石や煉瓦で家を造る必要はなかつた。徹頭徹尾木造建築で發達したのであつて世界に於ける木造建築の最も發達したものであります。それから氣候の方からの關係を申しますと、日本の建築は避暑の本位であります。然るに西洋の方は防寒的本位であります。此相違は建築の構造や形式の上に非常な相違を來すものであります。それは何故であるかといふと、今日の西洋建築は主として佛蘭西や英吉利や獨逸の方で發達した建築である。此等の國の氣候は夏は割合に涼しい、倫敦などでは冬服でも夏は凌げる。併し冬は非常に寒い。それですから其建築は寒さを防ぐ方を主として設計され成るべく壁を厚くして窓を小さくします。ところが日本の氣候は冬はさほど寒くはないが夏は非常に暑い。今晚なども随分暑い方です。西洋諸國は餘り暑くない上に空氣が乾燥して居る。日本は暑い、上に空氣が濕氣を多く帶びて居るのであります。空氣中に水分を十分有つて居るから身体から出て來る汗を吸収することが出來ないで汗が皮膚に流れる。所謂蒸暑いといふのであります。今夕などは随分蒸暑い方です。西洋ではさういふことは決してない。涼しい上に空氣が乾燥して居るから假令汗が出て直ぐ空氣中に吸収されてしまふ。朝鮮や支那なども同様である。寒暖計

などで見ますと朝鮮や滿洲や北京などの夏は九十七八度から百度位になりますが、それでも一向汗が出ませぬ。それ故朝鮮人や支那人などは筒袖の洋服のやうな服装をして居つて差支ないのであります。其上冬は非常に寒いから着物などは主として防寒的になつて居ります。其防寒的の筒袖ズボンの服装は夏にも適當して居るのです。西洋人の服装は今私の被てゐるやうな袖の狭い襟の詰まつたものは寒さ凌ぎには都合が宜い、其上西洋では汗が出ないから此服装で夏も少しも差支ない。ところが日本では汗が出ます。汗が出ますと扇子を使はなくてはならぬ。風に當らなくてはならぬ、風に當りますと皮膚から水分を蒸發しますから其際温度を持つて行くので涼しくなる。そこで日本の夏は浴衣に限る。袖からも胸からも裾からも風が這入る様に、長い間の經驗から日本の浴衣が出来たのであります。今夕の様な斯ういふ暑さに斯んな洋服を着てゐるのは非常に間違つた話であります。丁度それと同じやうに日本の建築も夏向に風がよく這入るやうに出来て居るのであります。夏になると障子も襖も開け放し風が吹通すやうに出来て居ります。東京などでは屋外の空氣の温度は体温より常に低いから風に當つて汗を蒸發すると涼しくなるのであります。それ故日本の家は浴衣と同じやうに何處からでも風が吹通すやうに出来て居る。此建物のやうに窓の小さい家は日本の夏には適當しない、唯西洋の眞似をすれば宜いと思つて氣候の事を考へずに設計すると日本の夏には適當しないものとなる。畢竟日本の家屋は從來何處までも避暑的で西洋の家屋は防寒的に出来て其間に大なる相違があります。第二は慣習であります。日本の方は

坐る方で坐禮本位の建築が發達し西洋の方は腰掛ける方で立禮本位の建築が大成されました。其相違から建物の間取其他總ての設備が違つて來る。構造形式も自らそれ／＼の特色を發揮することになります。日本の從來の建築は木造本位としては世界第一の發達をして居る。避暑本位の建築として坐禮本位の建築としても矢張り世界第一の發達をして居る。西洋の建築は石造本位、防寒本位、立禮本位で又非常に發達して居るのであります。西洋建築と日本建築とは斯ういふ風に根本から違つて居るのでありますから、兩者の様式は到底調和することは出來ない。鎌倉時代に宋の建築が這入つて來ても我建築と衝突することは割合に少なかつたのであります。宋の建築は木造であつて南支那の蒸暑い所から入つて來たのであるから少しも材料や氣候の點に於て矛盾する所はない。慣習の方も宗教的の方面ですから佛殿では坊さんが曲梁に腰を掛ける位のことです。普通の住宅には差支なかつたのであります。明治大正時代は之に反して、第一に困るのは慣習の點であります。吾々は早速西洋の立禮を採用し公共的生活は總て洋服になつてしまつた。役所でも會社でも學校でも皆晝の中は西洋風の生活をして居る。而るに自分の家に歸つて來ると矢張昔の通りに和服坐禮をまだ用ゐて居る。兎に角吾々の生活は半分はもう西洋風になつてしまつたのです。吾々には一方には從來の日本風を其儘守つて居り一方では西洋風を採用して居り、結局二重生活をして居る。洋服も和服も靴も下駄も必要である。食器にしても日本風の食器も必要であれば西洋風の皿もナイフもフォークも亦必要である。此二重生活は吾々に取つては非常に迷惑な譯であ

る。不經濟でそして不便である。結局どちらか一方に決定せねばならぬ、而し今更公共生活を坐つてやる譯には行かぬと思ふ。役所で疊の上に坐つて事務を執つたり學校で寺子屋式にやるといふことも出来ませぬから、將來は私的生活を公共的生活に合はせるやうに結局立禮本位に改めねばならぬと思ふ。現に支那でも昔の周漢時代は日本と同じ坐禮であつたが、唐宋頃から立禮に變つてしまつた。此點から考へて見ても將來日本も立禮に變ることが出来ると思ひます。さうすれば慣習の方から西洋風の建築を採用して差支ないことになつて來ます。又材料の方から云へは今日は最早木材が豊富でなくなつて來た。山林濫伐の結果と維新以來諸般の事業に木材を要することが非常に多かつた爲め木材が不足になつて來て今日では亞米利加あたりから木材を輸入する方が廉くつくといふことになつて經濟上からも木材建築は追々不利益になつて來た。其上都市建築では木造は廢めてしまはなければならぬ絶對に不燃質物を以て造らぬといかぬと思ふ。石とか煉瓦とか近頃流行する鐵筋コンクリートとか又は鐵骨構造とか云ふ者を用ひて少くも都市に於ける家屋を建築せねばならぬと思ふ。今日のやうに始終火事があり又屢大火に脅される様では我國民は經濟的にどれ程損失をして居るか分らぬ。其上若し外國でも戦争があつて爆彈攻撃でもやられたならば斯ういふ木造建築は一たまりもなく破壊されてしまふ。將來戦争の無いといふことは斷言が出来ませぬ。此頃電車の宣傳ビラに爆彈攻撃の結果を想へ木造建築は焚つけの如しと書いたそれを見て非常識だと攻撃した人がありますが永久に戦争が無いといふことは斷言が出来ま

すか、萬一戰爭にでもなつたら東京のやうな木造市街ではどういふ結果になりませうか、吾々はさういふことを非常に心配して居るのであります。何れにしても材料方面は段々西洋風の石造の方に移つて行くに相違ないのであります。しかしこゝに唯一つ變ることの出来ないのは氣候の點であります。西洋建築は防寒的でありますが、日本ではどこまでも避暑的でなければならぬ。無論冬は暖房の點に於ても充分注意を要しますが將來は不燃質の材料を以て避暑的の建築を建てるのが最も必要であります。此外にもう一つ大切なことは歴史的方面と國民の趣味であります。歴史が西洋の方とすつかり變つて居る、又國民の趣味も餘程相違して居ります。それですから假令西洋風の構造や材料を輸入しましても日本歴史を皆背景とし日本人の趣味に依て經畫することが必要であります、かくすれば自ら日本固有の特色が現れて來まして、西洋のものと一種違つた日本獨特の様式が出來ます。丁度鎌倉時代に於て支那の方から唐様が這入り天竺様が這入つて來ても日本人が其儘採用せず其長所を採つて從來の建築に應用しまして、一種斬新な剛健な建築を造り出したやうに將來の建築も假令西洋風の構造や材料を用ゐる慣習を採用しても西洋其儘の眞似をせず日本固有の特色を現さなければならぬ。昔の鎌倉時代に於て吾々の祖先が巧みに外來の様式を利用して固有の建築を造り出したと同じやうに、明治大正に於ける吾々國民も今日西洋から輸入する建築様式を全然日本化して將來西洋の建築と一種變つた日本固有の様式を大成する時期があるであらうと思ひます。またさう無ければならぬと思ひます。甚だ詰らぬことを長く申して清聽を煩しました、是で終りと致します。